

輸入りんごと経営の改革

の ぐち しげ かず
野 口 茂 和

1. 外国産りんご輸入元年

ニュージーランド産りんごに続き、昨年
の1月にはアメリカ産りんごが店頭に並んだ。
生産者は、バブル崩壊等による価格の低迷に
加え、りんごの国際化突入に対して危機感を
募らせた。

ワシントン州からは、初年度で9,100 トン
の輸入実績があり、単価は kg 当たり 230 円
程度だった。2月下旬以降は防カビ剤の混入
などにより 74~120 円の低価格で、品質面は
もちろん安全性の面からも日本市場での評価
は低い。今年度は最大で 1,500 トンの輸入見
込みとされているが、この量が輸入されるか
は疑問である。また、NZ 産りんごの2年目
の輸入量は 190 トンで、果実の品質と単価を
考慮すれば市場評価は低く、日本向け輸出は
失敗との判断もあるという。

これらの外国産りんごは、日本の5分の1
程度の労働時間で栽培されており安価ではあ
るが、品種や品質が日本の市場向きでない
と判断される。日本の果樹生産者の技術と集約
管理によって生産される国産りんごの品質の
高さは、外国産果実との競争に打ち勝つ最大
の武器となり、生産者の自信ともなった。

2. 経営改革への提言

最近生産者レベルの会議に出席していると、
外国産りんごの話題はめっきり減ったが、「こ
こ数年で今までの貯えを使い果してしまっ
た」とか、「今年の肥料を買う金もない」と
か、非常に厳しい話を耳にする。

果樹のように品質が重視される作物は、気
象の影響を受けやすい。平成5年は冷夏と日
照不足、6年は猛暑と大干ばつにより、品質
が悪く、収量も非常に低かった。昨年は7月
中旬を境に、それよりも前は多雨日照不足、

それ以降は猛暑干ばつと両極端な天候であ
ったが、凍霜害、台風といった大きな災害も
なく品質良好で収量も適量と思われた。しか
し、価格は安値安定といったところで、バ
ブル崩壊後の量販店の安売り戦争の影響のせ
いか、価格破壊、激安の波は、生産者無視の
価格を生んでいると思われる。

このような厳しい時代がいつまでも続く
とは考えにくい、我々生産者はこのような時
代だからこそ、後継者不足や担い手の高齢化
など種々の果樹産業の現状も考慮して、省力
技術を取り入れた経営の改革を行わなければ
ならないと思う。

3. 省力技術による経営の改革

昨年駐村研究員会議で報告したように、品
質を落とすことなく、効率良く省力化を進め
コストの削減を図るためには、(1)石炭硫黄合
剤、ミクロデナボン、リンナックルを使用し
た薬剤による摘花、摘果、(2)摘葉剤、着色増
進剤による着色管理の省力化と収穫期の拡大、
(3)機械利用の省力化としては高性能SS、
高所作業台、受粉機の導入などが考えられ
る。そして、今最も注目されているのがワイ
化栽培のショートサイクル（優れたワイ化効
果のあるM9台の自根を利用し、ワイ化効果
を高めるために台木の長さを40~60 cm 用
いて、20 cm ほどを露出・定植し、従来のワ
イ化栽培よりも木をコンパクトにして、早期
多収を図る栽培方法）である。以上のような
手法を組み合わせるとともに、産地に最も適
している品種、当地では優良着色系ふじ（長
ふ2、長ふ6、らくらくふじなど）への更新を
行っていけば、あらゆる面で省力化が図れ、
かなりのコスト削減につながると思う。それ
により規模拡大も可能となり、必ず経営の安
定が図れるはずである。

以上のように生産者側にも経営改革の芽が
生まれている。しかし、価格が安値安定の方
向では生産意欲がそがれてしまう。りんごに

限らず、生産者が最も苦しいというのでは、日本の農産物はすべてなくなってしまう。

りんご生産者の間では、「市場出荷では生活が成り立たない。贈答販売を考えるしか道はない」という声が多い。しかし、新食糧法の下では、米についても相当数贈答販売の分

野に流れてくるだろうし、農産物のすべてが贈答中心の販売ということが成り立つはずはない。あくまで基本は市場流通にあるのだから、流通面、売り手側にも大きな改革をしていただきたいものである。

（長野県茅野市・農業）